

ペルージャ宣言（日本語版）

2014年9月16日

天然、人造、あるいは淡水、塩水を問わず、湖沼は地球上のドラマチックかつ重要な景観のひとつである。湖沼は何世紀にもわたり、イタリアをはじめ世界各地で人間の文化の発展において中心的な役割を果たしてきた。湖沼生態系は、人の健康と福祉を支えるだけでなく、食料の生産資源、飲料水源、水上輸送手段などとして様々なサービスを提供するとともに、人間性を豊かにし、向上させるひらめき、創造性、魂の発現といった“ハートウェア”を象徴するものである。それゆえ湖沼は、流出入河川や地下水と一体的に存在する生態系として、生命を支える生態系サービスを提供するが、そのサービスを維持していくためには、失われていく生態系機能を回復・再生させることはもとより、世界的遺産として継続的に保全の対象とすべきなのである。またこの一体的存在は、人間や他の生物の水需要を満たすために必要な科学的知見の蓄積と流域ガバナンスの構築という面でも重要な意味を持っている。トラジメノ湖は、世界の他の多くの湖沼と同様に人間の文化的な発展を促す豊かな役割を担ってきた好例であり、このことは2014年9月1日～5日にわたって、この美しい町ペルージャ（イタリア）で開催された第15回世界湖沼会議の議論の中でも強調された。

このような視点を踏まえ、会議の参加者は以下の“ペルージャ宣言”をここに高らかに掲げる。

水はすべての生命にとって、量に限りのある、また人間活動に極めて影響されやすく、多くの用途で他のものに変えることのできない基本的なものであることを理解し、

湖沼は、いつの瞬間においてもこの地球上の表面に存在する液体状の淡水の90%以上を有しているだけでなく、最も多様な生態系サービスを人間に提供していることに留意し、

湖沼は人間社会の全般的な状況を映し出す鏡であり、湖沼生態系の状況は流域や流域を越えた人間活動によって累積した影響を反映したものであることを意識し、

湖沼は隔離された水界ではなく、さまざまな意味で相互に関係しあっている地球水システムの一部を構成するものであり、湖沼の劣化と破壊は物理的な境界をはるかに越えて影響を与えることを認識し、

世界中の人間社会における消費的なふるまいが拡大し、その傾向が人々の文化や生活を支え、豊かにしている健全な水生生態系サービスに及ぼす地球規模の影響に憂慮し、

早期に市民社会による予兆の指摘や科学者による検証結果や因果関係の指摘があったとしても、多大な時間を必要とする政治的なプロセスが、往々にして湖沼環境問題の解決に向けた政府の対策樹立の取組を遅らせてしまうことがあることに注意を払い、

過去数十年にわたる人と生物の生息環境を改善する取組において多くの注目すべき進歩があったにもかかわらず、湖沼などの静水システムの持続可能な生態系サービスを保証する上で不可欠な流域ガバナンスの向上、必要な能力の獲得や資金の導入という点で市民社会と政府は依然として明確なゴールを持ち得ていないと認識する。

それゆえ、参加者は以下のことを提言するものである。

自然や文化の遺産の損失を伴い、人類の持続的な社会経済的な発展と文化の進展の可能性を低下させる湖沼のさらなる劣化を食い止めるために、持続的な湖沼生態系サービスの達成が、現在および未来に向けた重要な評価および管理の目標として、行政、NGO、市民社会、工業、農業、研究者によって強調され、保証されなければならない。

文化遺産や文化的な価値、人間の福祉や生物多様性との関連において、湖沼システムの重要性がすべての湖沼管理に向けた努力の際に第一に考慮されなければならない。健全な湖沼と健全な人間社会の間の相互の営みの重要性に対する行政、市民社会、およびその他の利害関係者による認識はまだ十分ではないことに留意し、若者や女性の地域社会における役割について特に注意を払いながら、歴史的価値を保全し、健全な湖沼と健全な人間社会の間に存在する文化的な絆を継続的に進化させるための教育、意識啓発、周知活動、および能力開発を一層強化することが必要である。

湖沼そのものと湖沼に流入・流出する河川や地下水システムとのつながりに基づく一体的な存在が果たす役割が、持続的な生態系サービスを達成するためのすべての湖沼管理の取組の必須の要素として明確に認識されなければならない。この体性は、Rio+20の成果報告書「我々の望む未来」の中で述べられたメッセージや持続的な開発目標に関する国連の公開作業部会で強調された目標 6.6（2020年までに山岳、森林、湿地、河川、地下水および湖沼を含む水系生態系を保全し再生する）の記述と呼応しており、湖沼とその流出入システムは相互に影響を及ぼす要素として評価、管理される必要がある。

気候変動の影響や、予見されている水文学的なサイクルの変化によって生ずる水不足、大洪水、極端な水事象など気候の不確実性に伴うリスクのバロメーターとしての湖沼の役割にもっと目が向けられるべきである。この結果、湖沼が持つ貯水能力のさらなる拡大が求められ、それに伴って増大する湖沼環境の潜在的な負の影響についても注意が必要となるであろう。

気候変動に基づく自然災害のリスクや水セクター間の競合の激化などが湖沼流域の重要な要素として認識されるようになる。持続的な水システムを促進するうえで、この変化する世界に人間が対応していくための基本的な要素を形成し、工学、生態学や陸水学の分野を超越し、結び付ける機能を果たすことができるエコハイドロロジー(生態水文学)の役割にもっと注意が向けられるべきである。

自然、文化、ガバナンス、およびこれらとつながるさまざまな要素を全体として包含した統合的な管理に基づく適応と応用がすべての水関係者の決定的に重要な目標として検討されなければならない。現在、多くの水資源管理の枠組みが存在するが、静水によって提供される持続的な生態系サービスを保証するという重要な目標に十分に対応しているものはない。公益財団法人国際湖沼環境委員会(ILEC)によって開発され、湖沼と他の静水システムとそれらに流入・流出する河川システム、およびそれらに支えられる人間社会とのつながりとバランスの維持保全を志向し、流域の状況を統合的に捉える手掛かりを提供する包括的な枠組みとして構想された統合的湖沼流域管理(ILBM)は、持続的な水系生態系サービスを達成するための大きな前進として認識されるべきである。